

学位（博士）論文要旨

## 性暴力と社会関係

—個人化される困難と専門家支配をこえて—

2016 年度 博士論文

横山 麻衣

### 本論文の問題関心

本論文の目的は、性暴力がもたらす影響の医療化や心理主義が、性暴力にあった者が直面しうるどのような困難を把握し損ねており、また、支援やその専門性に必要な知識をいかに方向付けているかを明らかにし、今後の性暴力研究の課題を考察することである。

結論から言えば、性暴力がもたらす影響の医療化や心理主義は、性暴力にあった者にとっての他者の変容および社会関係上のさまざまな困難をとりこぼしており、支援については、心身にもたらされた影響の軽減に資するとされる有資格者による支援こそ（のみ）が専門的であり有効性を持つという社会的認識を支えていると思われる。それゆえ、今後の性暴力研究においては、性暴力がもたらす影響の包括的な把握およびそれとの社会的要因の関連を明らかにしていくことが必要だと思われる。

### 本論文の構成

第 1 部は、性暴力がもたらす影響についてである。第 1 章では、性暴力がもたらす影響について問うた先行研究をレビューした。概して、性暴力がもたらす影響は、性暴力にあった者の心理状態、精神症状、身体的不調に照準し測定されてきた。他の水準に着目した研究も僅かながらあるが、QOL を構成する一要素として位置づけられており、詳

細な分析や考察はなされていなかった。第2章では、ソーシャルサポート、強かん神話や二次被害についての先行研究をレビューした。これらは、性暴力にあった者による被害の開示に対する他者の反応に関心を持つものであり、社会的要因を対象にしてきた研究である。それゆえ、研究の問題関心は類似しており、概念間関係も一定の図式で言及されているが、必ずしも相互参照がなされておらず、それら先行研究を包括的に検討するような研究もなされなかったと言える。第3章では、性暴力にあった者が直面しうる社会関係上の困難について、著書を対象にスティグマの管理・操作の視点から内容分析し、考察した。結果から示唆されるのは、性暴力は従来の社会関係の維持や、新たな社会関係の構築をも阻みうるということである。第4章では、そうした社会関係に性暴力がもたらす影響は、精神医学的枠組みによって包含されるかについて、性暴力にあった者へのインタビューデータを対象に MDSO-MSDO アプローチを用いて二次分析を行った。分析から示唆されるのは、性暴力による影響の把握は、医学的枠組みだけでは不十分であり、社会関係上の困難をも把握しうる枠組みが必要ではないかということである。第5章では、1章から4章までをまとめ、考察した。性暴力がもたらす影響は、医療化や心理主義のもと、PTSD などのトラウマ反応を中心に、おもに心身の水準で把握されてきた。しかし、性暴力は社会関係にも影響をもたらす。そのことを踏まえると、社会的要因に着目してきた研究群が抱える限界も見えてこよう。強かん神話のような偏見的意識を持つ他者との具体的相互行為を経ずとも、社会関係はネガティブな影響を受けうることや、ソーシャルサポートの供給源である他者というものが変容しうることなどが、想定されていなかったからである。性暴力にあった者が直面しうる困難と社会的要因とがどのような関係にあり、影響を与え合うかについては、従来の研究デザインを根本的に見直した上で明らかにしていく必要があるのではないかとと思われる。

第2部は支援についてである。第6章では、性暴力被害救援のためのワンストップ支援センターにおける支援の現状について、報告書や筆者の経験に基づいて考察した。ワンストップ支援センターでは、電話対応やインテーク、婦人科受診の同行支援などに何らかの専門性が

必要であるとは必ずしもみなされておらず、伝統的な「専門性」を持たない支援者の役割は明示されていなかった。第7章では、男女共同参画センターの相談事業について、質問紙郵送調査および筆者が相談員としてかかわった経験に基づいて分析・考察した。男女共同参画センターでは、相談員への低賃金かつ雇止めが常に可能な待遇のもと、長期的・基幹的労働を担わせることが可能となっているが、裁量を持つ正規公務員がそうした労働環境を評価することは、人事制度などにより難しい傾向にあった。第8章では、民間団体による一時保護事業のあり方について、ある団体での筆者の活動経験と、NPO法人で活動する女性を対象にした調査報告書に基づき、考察した。当該団体が考える支援の価値は、第1部で述べたような社会関係にもたらされる影響に働きかけうるようなものであり、非常に示唆的だと思われる。しかしながら、こうした非営利組織は主に、学歴や社会問題への意識が高い、経済的に豊かな女性たちによって担われてきた。第9章では、大学学生相談室のデートDVへの対応について、質問紙郵送調査の結果に基づき、MDSO-MSDOアプローチを用いて分析し、考察を行った。学生相談室では、概してデートDVは十分に認識されていなかったが、相談室責任者のデートDVについての知識・経験・裁量が充実している場合には、デートDVやストーカーに関する相談員の知識のあり方は、相談室体制の自己評価において重視されることがわかった。第10章では、6章から9章をまとめた。性暴力にあった者への支援については、支援の人手を増やし、知識・技能を向上させることが必要だと言われる。しかし、支援の担い手をとりまく労働環境や社会状況に着目すれば、そうした議論が的を射ていないことがわかる。従来の支援体制は、近代家族を前提に一次的に成立しえたものである。そうした女性たちによる、社会関係にもたらされた影響を軽減していく支援は、新しい「専門性」であると思われるが、評価に値するとはみなされていない。今後も、女性の無償労働ありきの支援体制のままでは、持続可能性は非常に低い。すでに非営利組織では世代交代が大きな課題となっているからである。性暴力被害者支援については今後、専門性がいかに構成されているかや、支援の担い手の社会状況をも踏まえなければ、生産的な支援構想の議論は不可能だと思われる。

第3部第11章では、第1部と第2部から考察しうることを述べた。第一に、性暴力がもたらす影響の医療化や心理主義と、支援を受ける資格の認定についてである。本来、産婦人科学や精神医学などの医学や心理学が査定しうるのは、性暴力にあった者が受けた総影響のうち、身体的、精神的、心理的な側面だけであるはずである。しかしながら、精神医学や心理学的枠組みでの測定が、あらゆる支援の必要性に対する包括的な判断および方向付けが可能だとされるような傾向がある。「回復」には、他者とのつながりが有効であるとしばしば言われてきた。そうであるならば、なおさらのこと、健康を狭義にとらえ、社会関係の視点を包含していないような現状の支援資格認定のあり方は、今後見直される必要があるのではないだろうか。第二に、「専門性」についてである。性暴力にあった者の支援において、伝統的な「専門性」に基づく対応が必ずしも有効でなく、「専門性」をもたない者による対応への評価が高いことから考察しうるのは、性暴力にあった者が直面しうる苦難についての研究枠組みもまた、大いに改善の余地があるということではないだろうか。とくに自己および他者にもたらされる影響とその機能に関して、研究が十分なされていないように思われる。今後の課題としたい。

### 主要参考文献

- Deitz, M. F., S. L. Williams, S. C. Rife, and P. Cantrell., 2015, "Examining cultural, social, and self-related aspects of stigma in relation to sexual assault and trauma symptoms," *Violence Against Women*, 21(5): 598-615.
- Freidson E., 1970, *Professional dominance: the social structure of medical care*, New York: Atherton Press. (=1992, 進藤雄三・宝月誠訳, 『医療と専門家支配』 恒星社厚生閣.)
- Goffman, E., 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Englewood Cliffs: Prentice-Hall. (=2001, 石黒毅訳, 『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ 改訂版』 せりか書房.)
- Herman, J. L., 1992, *Trauma and recovery*, New York: Basic Books. (=1996, 中井久夫訳 『心的外傷と回復』 みすず書房.)

Mead, George Herbert, and Charles William Morris., 1934, *Mind, self, and society: from the standpoint of a social behaviorist*, Chicago: University of Chicago Press. (=2005, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収・日高六郎訳『精神・自我・社会』青木書店.)

Suris, A., L. Lind, T. M. Kashner, and P. D. Borman., 2007, "Mental health, quality of life, and health functioning in women veterans: differential outcomes associated with military and civilian sexual assault," *Journal of Interpersonal Violence*, 22(2): 179-97.

Ullman, Sarah E., 2010, *Talking about sexual assault: society's response to survivors*, Washington, D.C.: American Psychological Association.

(よこやま まい・千葉大学子どもこころの発達教育研究センター  
特任助教)